九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

劉辰翁研究 : 宋元交替期の活動を中心に

奥野, 新太郎

https://doi.org/10.15017/1455991

出版情報：九州大学, 2014, 博士（文学）, 課程博士
バージョン：
権利関係：全文ファイル公表済

区分	甲

論文題目　劉辰翁研究　―宋元交替期の活動を中心に―

氏　名　　奥野　新太郎

論 文 内 容 の 要 旨

「元代」という語は様々な問題を有している。例えば元代の起点はチンギスの即位か、金朝滅亡後か、はたまた南宋滅亡後なのか、まずその指す範囲が判然としない。そうなると、「元代文学」という語もまた問題になってくる。一体、我々は何を以て「元代文学」と呼んでいるのか。この問題を考えるには、当時の中国大陸において、北方では金から元へ、南方では宋から元へ、文学がどのような変遷を辿ったかを、個別事例を重ねながら一つ一つ丁寧に検証してゆく必要がある。そこで本論文は宋末元初の劉辰翁（1232-97）という人物に着目し、評点を中心とする宋元交替期の彼の活動を通して、中国文学が宋から元へといかに変遷したのかを考察するものである。

まず第一章では、元代文学の制度史上の背景について論じた。文学（とりわけ詩歌）を取り巻く環境において、唐宋時代と元代との最も大きな差異は科挙の有無である。モンゴルによる科挙の停止について、従来は制度史上の関心が主であった。だが科挙の停止は文学においても重大な意義を有しており、とりわけ詩歌創作に関しては、科挙の停止によって作詩への取り組みが盛んになったという積極的作用をもたらした。そして科挙の停止は劉辰翁の評点活動の重要な背景でもあった。

第二章では、劉辰翁について一般にもたれている宋末の「愛国詞人」というイメージについて再検討し、劉辰翁を従来のように無批判的に「愛国詞人」と称することが妥当ではないことを論じた。南宋滅亡以降、彼は元朝に対する反抗を貫いたのではなく、仕官こそしないものの、元朝官衙との関わりは保っていた。元朝に仕官しなかった宋末の人間は、それがすなわち元朝への反抗の態度と解されがちであるが、実態は必ずしもそうではない。これは劉辰翁のみならず、元代のいわゆる「南宋遺民」と呼ばれる人々が実際とは乖離したイメージを以て捉えられているという、この時代につきまとう先入観の危うさにも関わる問題である。さらに劉辰翁の場合、彼の「愛国詞人」というイメージの出現には近代中国のイデオロギーも恐らく無関係ではない。これらの様々な「イメージ」を取り除くことは、今日の元代研究の喫緊の課題なのである。

第三章では、劉辰翁の評点活動の実際と、それが彼の活動拠点である江西地域の環境に支えられたものであることを論じた。当時の江西は出版業の盛んな地域であり、劉辰翁の評点本などの著作

が多くの人々に読まれ得たのも、ひとえにこの木版印刷の盛行の恩恵であると言ってよい。そして、江西は元代に著名な文化人を多く輩出した地域でもある。彼の活動が江西という地域で行なわれ、江西の人々に影響を与えたことは、彼が江西人であるがゆえに当然のことであるが、さらにそれは結果として、元代においても予想以上に大きな影響を与えることになった。また本章では、従来あまり知られていなかった劉辰翁の『文選』『詩経』に対する評点や注釈作業についても詳細に考証している。

第四章では、劉辰翁の選集編纂活動について論じた。彼には『興観集』『古今詩統』という選集の著作があった。両者ともすでに散佚しているが、関連資料を博捜して、能う限りその実態の把握を試みた。また関連して、元代に盛んに行なわれた「采詩」という名の選集編纂活動についても論じた。采詩とは古代の伝説の采詩官に基づく語であるが、この語が実際の、しかも民間の選集編纂活動に用いられたことは、私見によれば元代以前には見られなかった現象である。この采詩活動について、関連資料によりつつ、その性格や動機について考察した。結論として、当時の采詩活動は元代という時代特有の状況や動機のもとに行なわれたものであり、かつ劉辰翁の選集編纂活動も動機部分においてこの活動と相通ずるものが看取された。

第五章では、劉辰翁の評点の実例を分析した。彼の詩歌への評点の特色として、作品中の「情」を重視するというものがある。これは中国文学においては『詩経』以来の伝統的なテーゼであり、必ずしも劉辰翁の創見というわけではないが、この「情」の重視は、伝統的なものであると同時に、元代の詩論において盛んに主張されたものであった。元代詩歌はこのテーゼを以て、「情」よりも「理」に傾いていた宋代詩歌の傾向を打破し、唐詩へと回帰したものとも言われる。かくも「情」の重視が叫ばれた元代詩歌において、その草創期に同じく「情」を重視する劉辰翁の評点が行なわれ、しかもそれが同時代人の高い評価を得、或いは影響を与えたことは、劉辰翁の評点活動が、元代詩歌、或いは元代詩論の始まりを告げるものとして、画期的な意義を有していたことを意味するのである。

以上、本論文は文学史上の宋元交替という問題について、当時の人々が元という新たな時代に対応しながら、それぞれの文学活動をどのように展開していたかを、劉辰翁という一文人の事績を通して明らかにした。その際に、科挙の停止や劉辰翁のイメージ、采詩活動などについても従来にない具体的な知見を提出している。